

大災害と芸術

元文化庁長官、近藤文化・外交研究所代表 近藤誠一

そのとき私は高層ビル49階の会議室にいた。最初に動いたエレベーターで下に降り、長官室に戻って被災地の文化財被害の調査や、レスキューの相談をした。

しかし予想外のことが起こった。「歌舞音曲の自粛」である。予定されていた結婚式やコンサート、美術展が軒並み中止された。日本人独特の「空気が国を覆った。昭和天皇の崩御に至る数カ月を思い出した。夜の劇場から灯が消えた。文化芸術は「不要不急なのか?……答えられなかった。」

3月末、たまたま都内で決行されたコンサートに行った。シヨスタコーヴィッチが苦難を乗り越えて作曲した交響曲第五番は、あたかも被災者の方々へのレクイエムとなった。真剣な顔つきで、魂をこめて弾くオーケストラのひとりひとりと、それに感動する聴衆のこころがひとつになった。割れん

ばかりの拍手と感動、涙……そして誰もの顔に、安堵に近い色が見えた。自分には何もしてあげられないという悲しさと歯がゆさ、諦めの気持ちを思い切って発散させ、互いに共鳴し合う場となったのだ。出口の募金箱には長蛇の列ができた。

そうだ、これでいいのだ。被災地に何も知らぬ一般人が行っても何の役にも立たない。音楽でひとつにした心を、募金とともに現地に届けることで、意気消沈した社会が勢いを取り戻し、力強い復興支援につながるのだ。そんな気持ちが生まれ、4月12日思い切った文化庁長官メッセージを出した。文化芸術の自粛は止めよう。元氣いっぱいいの生活を取り戻し、社会の力を盛り上げることが、生き残ったわれわれに出来る最大の復興支援なのだと訴えた。

あれからはや10年。大災害の再

来はあまりに早かった。感染拡大防止のための自粛は、再び文化芸術界に極めて深刻な危機をもたらした。しかし今回は感染予防策をとりながら何とか文化芸術の力によって共感を高め、連帯を強めようというエネルギーと、アーティストの自信を感じた。政府自治体もアーティスト支援に踏み切った。

そしてあの時と同じことが起こった。2020年9月、東京都交響楽団の半年ぶりの生演奏となったベートーベンの『英雄』が、あのときと同じ感動と、共感と、連帯を喜ぶ涙を生んだのだ。経済成長やテクノロジーだけで人間の幸せは実現できない。苦痛を分かち合い、いたわり合う場を備えることこそ人間が人間たる理由があるのだという認識が強まっていると感じた。これをポストコロナ時代を担う次の世代に、しっかりと継承すべき教訓である。